

準優勝

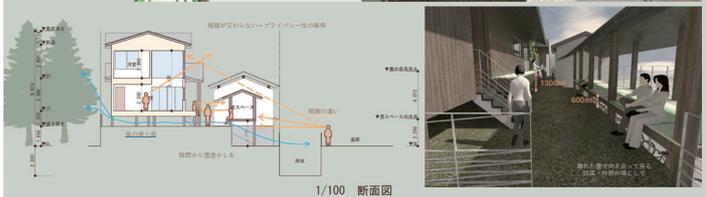
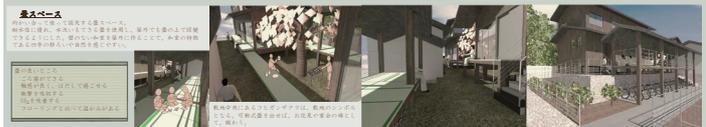
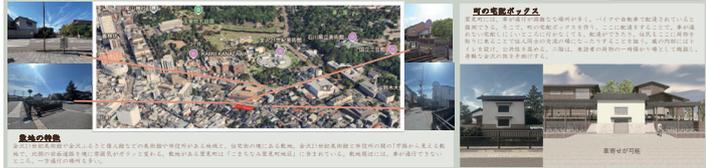
畳の縁側がつなぐ町の暮らし

石川県 | 石川工業高等専門学校 選手 / 3年生2名



畳の縁側がつなぐ町の暮らし

既存の建物をそのまま残し、入口を変え、町の宅配ボックスを作った。
畳とは高さを変えて、古い畳の縁側を作り、その下を、屋根付きの駐輪場にした。
さらに高さを変えて、自宅に縁側を設け、高さの違う向かい合った2つの縁側を作った。
レイヤーのように高さや重みの違う建物を組み合わせ、町の人、観光客、ここに配達物を集める人、その荷物を取りに来る人などに合わせた
町の新しい和室、縁側や町の宅配ボックスなどのまの縁側の設計によるような「こまちなみ里見町地区」の基準を満たした建物を設計した。

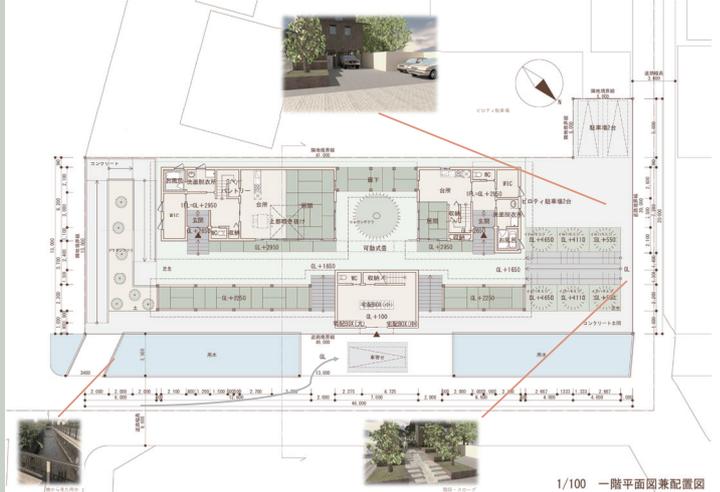


この作品は、日本の伝統的な建築の要素である「縁側」や「和室」に、「可動式畳」や「高さや重みの異なる建物」といった工夫を組み合わせ、現代都市で進むコミュニティの希薄化という課題に向き合った、完成度の高い提案だと感じました。和室を一つの閉じた私的空間として扱うのではなく、町と住まいを緩やかにつなぐ「中間的な場所」として捉え直している点に、現代らしい視点と丁寧な思考が窺えます。

計画の中心は、敷地南側を地域に開き、「畳の縁側」を住民が自由に使える共有スペースとして設けていることです。この畳の縁側は、ただ通り抜けるための場所ではなく、人が自然に腰を下ろし、くつろぎながら会話を楽しめる場として考えられています。床を板ではなく畳にすることで、やさしい触感や安心感が生まれ、訪れる人を温かく迎え入れる空間になっています。

建物の奥へ進むにつれて、パブリックからプライベートへと段階的に性格の異なる空間が重なっていく構成も印象的です。開放感を保ちながら、必要なプライバシーも確保する、理にかなった空間づくりだと評価できます。

また、「町の宅配ボックス」を敷地内に取り入れた点は、とても現代



的で興味深い発想です。日常生活に欠かせない設備を、かつての井戸端会議のような人と人との交流を生むきっかけとして活用しており、自然なコミュニケーションを促す仕組みがうまく考えられています。さらに、「可動する新しい和室」という考え方は、和室を固定された空間ではなく、状況に応じて使い方をえられる柔軟な存在へと発展させています。家族構成の変化や地域の行事に合わせて位置や役割を変えられる点は、日本の住文化がもともと持つ柔軟性を、現代的に表現した意欲的な試みだと思います。

一方で、可動和室を実際にどのような構造で成立させるのか、屋外に近い畳空間をどう維持管理するのか、気候変動や衛生面にどう対応するのかといった課題も残されています。これらについて具体的な工夫が示されれば、提案の魅力はさらに現実味を増すでしょう。

全体として、「こまちなみ里見町地区」という地域の特性を十分に調査したうえで、和室を人と地域をつなぐ装置として捉え、建築が果たす社会的な役割を分かりやすく示した提案だと感じました。町全体を大きな居間のように変えていく可能性を秘めた、知性と夢のある作品だと思います。準優勝おめでとうございます。(田中隆司)